

# 和仁估安聡本



## ミカサフミ 解説

くヲシテ、原文の現在語訳付く

ホツマツタエ史学研究会

吉田六雄







# 神載山書紀



和仁估安聡本

元  
①  
母  
△  
元

ミカサフミ  
解説

くヲシテ、原文の現在語訳付く

ホツマツタエ史学研究会

吉田六雄



ミカサフミ 解説

本書の紹介

はじめに

当「ミカサフミ解説」の底本は、滋賀県高島市勝野の旧家・野々村家所蔵の野々村立蔵写本「神載山書紀」（以後、ミカサフミと呼ぶ）を「使用させて戴くことになりました。また、使用に当たっては、当写本を管理されておられます現当主の野々村直大氏の「承諾を戴きました。この甲斐があつて、長年の悲願であつた「ミカサフミ」の解説本を完成させることができました。」

今回、解説するミカサフミは、江戸時代中期に確認された七アヤになる。また、壇祭りの文を含めると八アヤになる。前文は、「クニナツが述ぶ」として、伊勢の神臣・大鹿島のクニナツと大三輪の大田田根子のスエトシが奉納文を書いている。また、最初の「アヤの「東西四箇(㊦)の文」は、奈良の春日山の麓の三笠社にて、天児屋根が「おのおの古の文」説くところから始まる。そのため、ホツマの「アヤと大半が類似している。ニアヤの「サカノリの文」は、ホツマのニアヤ。ミアヤの「姫三男の文」は、ホツマのミアヤ。四アヤの「コエ(国)の十二(名)の后立つ文」と五アヤの「春宮の文」は、ホツマの六アヤ」と一部が類似している。

そして、六アヤ以降は、ホツマより離れて、ミカサフミ独自のアヤとなっている。その六アヤの「高天成る文」は、古代の宇宙史観が述べられ、一日を「トメチ」と記述しており、理系的な暦、尺度が古代にあったことがわかる。七アヤの「嘗めことの文」は、古の代の年中の行事が記述され、現在に繋がる行事を目にすることができる。八アヤの「壇祭りの文」は、縄文時代～弥生時代の竪穴住居より家造

りが起こった頃の記述が書かれている。参考として、巻末に複製版「神載山書紀」を添付した。「覧下さい。」

特に、注目されることは、地球の巡り（一周）を三百六十五トメチと記述としている。このことより、一日は一トメチとなる。また、「アイフヘモラスシの八神を「アナレ（天馴れ）神」。更に、アナレ神とモトモト（元基）神を合わせて、アナミ（天並）神と云うことが判明する。なお、モトモト（元基）神のトホカミエヒタメの八神は。後に、ヤモト（八元）神と云われると記述される。

ここに書いたアナレ（天馴れ）神、アナミ（天並）神は、ホツマツタエ、フトマニ、ミカサフの三書においては、明確に記述していない。そのため、ホツマツタエの4アヤの元基、天馴れの神を表す神名については、多くの研究者の論文を見ても相違があった。

4アヤ5〜6

モトアケオ ウツスタカマニ 元明を 遷す高天に

アメミオヤ モトモトアナレ 天御祖 元基、天馴れ ・ 元基と天馴れ神を合わせて、アナミ（天並）神と云う。（吉田説）

ミソフカミ マツレバタミノ 三十二神 祀れば民の

トヨケカミ トヨケ神

今回、国文学を研究した結果、4アヤ5〜6の元基、天馴れの神名が付けられた根拠を明確に見出すことができた。また、ミカサフミがホツマと違うヲシテの文字は、メ「 $\text{\textcircled{メ}}$ 」である。 $\text{\textcircled{メ}}$ は、メ（女）、メ（陰）を表していた。

なお、当ミカサフミ解説本では、ヲシテ学を学問の基本としているため、「神載山書紀」本のヲシテ原文のみを引用し、漢字を省略しさせて載いております。

令和3（2021）年3月22日 横浜の自宅にて

吉田六雄

本書の紹介

はじめに

目次

ヲシテ(原文)

瓶①②△瓶 公井田卒①田△  
 瓶①②△瓶 中卒田卒①田△  
 瓶①②△瓶 中田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 附家田卒田①田△  
 道妻田△田 中田卒田卒①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△  
 瓶①②△瓶 田卒田卒田①田△

カタカナ訳

ミカサフミ クニナツガノブ  
 ミカサフミ キツヨチノアヤ  
 ミカサフミ サカノリノアヤ  
 ミカサフミ ヒメミヲノアヤ  
 コエソフノ キサキタツアヤ  
 ミカサフミ ハルミヤノアヤ  
 ミカサフミ タカマナルアヤ  
 ミカサフミ ナメコトノアヤ  
 ミカサフミ ハニマツリノアヤ

解説

三笠文 クニナツガ述ぶ  
 三笠文 東西四箇(ち)の文  
 三笠文 サカノリの文  
 三笠文 一姫三男の文  
 コエ(国)の十二(名)の後立つ文  
 三笠文 春宮の文  
 三笠文 高天成る文  
 三笠文 嘗めことの文  
 三笠文 埴祭りの文

後記  
 参考文献

複写版 神載山書紀

神載山書紀

目次 (原書 和仁佑安監本)

神載山書紀自序

第一	初割東西四諦教	.....	卷末に神載山書紀を添付
第二	天神世定酒法教	.....	ホツマと一部が類似のため、省略
第三	一女三男降誕教	.....	同右
第四	賢扶桑拾遺類教	.....	同右
第五	天照太神奉宮教	.....	同右
第六	神教成高天原教	.....	.....
第七	神教年中行事教	.....	.....
	家敷座摩地搭祭教	.....	同右

元① 母△ 元

△ 舟⊕ 卒① 田△

ミカサフミ

クニナツが述ぶ

飛の母△飛

ミカサフミ

ミカサフミ(注1参照)

△飛の母△飛

クニナツガノフ

伊勢の神臣・大鹿島のクニナツが述ぶ。

- ①飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛

カミガヨノ トホコノミチモ  
 ヤヤサカフ カレオヲサムル  
 ヤマトタケ カミニカエサノ  
 ノコシフミ

- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛

ソメマセハ トミモミカサノ  
 フミオソム オオタミネコモ  
 ホツマフミ ソメサミクレハ  
 ミコトノリ

- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛

キミハミハタオ  
 オオタミネコモ  
 ソメサミクレハ  
 ソナフタカラト

- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛

シカレトカミヨ  
 コトバタカエハ  
 コレモロイエノ  
 イマノテニハニ  
 ナツラエテ  
 カタチトワザト

- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛
- △飛の母△飛

ソノアチオ トクトエザレハ  
 ミチノクオ ユキタガフカト  
 オソルノミナリ

イサナギ神が治める御代の政りは、典(トノヲシテ)と剣(サカホコ)を用いた瓊矛の道であった。その以降の政りは、イサナギに倣われるや、民心も安定し商いもやや榮ふ世に成つてきました。故(それゆえ)イサナギが初められた瓊矛の道は、長く続きタリヒコ(景行天皇)の御世まで平穩無事に治る世になり、タリヒコの皇子のヤマトタケ(古代ノ戦前までの呼び名、戦後はヤマトタケル)は、イサナギ神に返さの遺し文を書かれたのであった。

君(景行天皇)は、天皇の印の御機お布に染め増せば、天皇の臣のクニナズ(大鹿島)もミカサの文(古代天皇の家系のことを記した書)お布に染む。三輪の臣である大田田根子もホツマ文を布に染め君に捧ぐれば、三種法を備ふことが君の宝と勅り。

然れと(そうではあるけれど)神代と今の世との言葉の違い(いちがわせる)れば、瓊矛の道にも逆(逆らう)。これ諸家の伝え文。今のてにをはに準え(同類・同格とみなす)させて、形(外見に現れたかたち。)と技(なんらかの意図をもってなしたこと。また、その行為)とその二つの味お解く。問えざれば、ミチノク(瓊矛の道の奥義)おユキタガフ(いきちがう)かと 恐れるのみなり





## 注記の解説

### ミカサフミの解釈（注1）

天皇の印である三種神宝のことをミカサと謂う所から、古代天皇の家系のことを記した書。

### アメツチの記述（注2）

☆ホツマツタエ・15文18頁9

アメツチノ ヒラケルトキノ ヒトイキガ メオトワカレテ オ  
ハアメニ メハツチトナル オノウツホ カセウミカセモ ホト  
ワカレ ウオセノムネハ ヒノワナル イメノミナモト ツキト  
ナル ツチハハニミズ

### コホシの記述（注3）

☆フトマニの「アヤマ」に、「コホシ（九星）」の記述がある。

アヤマ

天山

アノヤマノ ナカウツ

天の山の 中ウツ

ロキカ アワノスナ コホ

ロキカ アワの砂 九星

シノエナノ ムネソア

の胞衣の むねそ編

ミケル

みける

訳

「九星の胞衣」の「九星」は、天常立神の九星を云い、更に、九星は、天上に居ます御中主神（1神）と、その外周に居ます元々神（8神）を意味し、「胞衣」の意味は、胎児を包んでいた膜や胎盤などから、胎星を包んでいた宇宙となり、「九星の胞衣」は御中

主神、元々神（8神）を包む宇宙を意味するようです

☆ミカサフミの「タカマ（高天）成るアヤ（綾）」の記述。

ミカサフミタカマナルアヤ

ミカサフミタカマナルアヤ

ヤマクイノ タカマオコエハ

ヤマクイの 高天を請えば

クサナギテ コホシオマツル

草薙ぎて 九星を祭る

ユキノミヤ アメトコタチト

ユキの宮 天常立と

スキトノニ ウマシアシガイ

スキ殿に ウマシアシガイ

ヒコチカミ アワセマツレハ

ヒコチ神 併せ祭れば

ナモタカマ モロアツマリテ

名もタカマ 諸集まりて

### 熱田神の記述（注4）

ホツマツタエ（40文162）

ハラの宮を写して、熱田に新しい宮を建て「新ハラの宮」とした。これを熱田神宮と云う。祭神は、大真の神である。また、ヤマトタケも神上がり後に熱田神と云われる。

